內鮮一體隨想録[[1]](#footnote-1)

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　香山光郎（舊李光洙）

內鮮一體とは朝鮮人の皇民化をいふのであつて雙方步み寄ることを意味するのではない。朝鮮人の方で、どんなことがあつても天皇の臣民にならう、日本人にならうと押掛けて行く氣魄によつてこそ、內鮮一體はなるのである。だから內鮮一體の鍵は朝鮮人自身が持つてゐることゝなる。

朝鮮人の識者階級で、よく、「本當に內鮮一體にしてくれるのかな」と、如何にも不安さうに喞つてゐる聲を聞く。

眞に內鮮一體となれば、內地人の朝鮮人に對する特權が消失するから、內地人は、朝鮮人が本當に日本人になることを嫌ふだらう、といふ心である。これは一見、馬鹿々々しい杞憂のやうであるが、實際は相當に根深い杞憂である。また、意外にも內地人の中で、そんなことをいつてゐるものもある。

しかし、內鮮一體になることを許すと許さぬとは、上御一人の大御心であつて、內地人だからといつて、どうのかうのといふ性質のものではない。しかも內鮮一體、即ち朝鮮人は一視同仁、內地人と變らぬ、陛下の赤子であることは畏くも明治大帝の御詔勅によつて炳乎確乎として、動かすベからざる皇謨になつてゐることである。唯恐多いことには、隨分永い間朝鮮人が、それを認識し感じたてまつらなかつたまでのことである。

だから、朝鮮人側からいへば、ひたすらに自己を皇民化して行けばいゝ。內鮮一體にしてくれるとかくれぬとか、そんな心配は、一切無用だ。問題は朝鮮人自身の心撙や努力にある。もし朝鮮人が發憤して國語を學び、日本精神を學び、日本の禮儀作法を學び、そして內地人同様臣民の道を實踐する日が、十年以內にあるとしたら、內鮮一體は十年以內に完成されるだらう。

しかし、もしまた、朝鮮入が、發憤せず、日本精神の實踐者となることを嫌ふか、怠けるならば、百年千年經つても、本當の內鮮一體は來ないかも知れぬ。もしかさういふことがあると假定出來るならば、日本のため、朝鮮人自身のため、これほど大なる不幸はないであらう。或は、その場合は、朝鮮人の子孫は、國家より見葉てられ、膺懲せられて、自滅の運命を辿るかも知れぬ。

しかし勿論そんなことはない。內鮮一體は必らずなる。要は一日でも早くその日を來せることだ。一日遲れゝば一日の損がある。

然らばどうすればいゝか。すべての朝鮮人よ。今日から國語を學ばう。そして內地人並みに國語で讀み書き話すようにしよう。意通ずれば足りるといふ程度ではなしに、文法も發音もイントーネーションも完全になるように學ばう。皇民化の第一の要件は國語を知ることであるからである。

そして妻や子に、隣りのものに國語を敎へよう。二千三百萬が全部、內地人同樣に國語で讀み、書き、話すことが出來るように、大きな熱心な運動を起さう。朝鮮人が全部國語が解るようになれば、第一には、日本が強くなり、第二には朝鮮人の國民としての地位が向上し、第三には朝鮮人の知識や文化が向上し、第四には各個人の生活がよくなる。こんないゝ國語を何が故に學ばせないのか。何が故にもつともつと敎へる運動を起さぬのか。

三個月、日曜日を除けて、敎授日數七十五、一日二時間で、百五十時間、百二十時間の國語、三十時間の算術といふ敎育で、アイウエオも知らなかつた人たちが、日常の會話も出來、君が代や海行かばを歌ひ、假名の手紙も書けるやうになつた。これは、京城に於ける、野村弘遠氏を會長とする國民訓練後援會が、過去一箇年に於いて、二千餘の成人を敎へた實績によつて、試驗濟のことである。

また同會では、休暇中の中等學生をして各々その鄕里に於いて、未就學兒童並びに成人に國語を普及せしめる案を立てゝ、今期冬期休暇には八百人の男女學生が、總督府發行の敎科書を、每人五册づゝ携へて、現に國語普及の御奉公をしてゐる。来る夏期休暇には、學務當局の後援を得て、二萬人ばかりの男女學生を動員しようとしてゐる。

今後十年間、五百萬人の朝鮮人に國語を敎へなければならない。五百萬人といふのは三十歳以下の男女である。これらの人たちは、高度國防國家建設のために、直ちに御泰公の出來る戰士だ、生產戰線に於いてばかりでなく、直接兵士として一線に立つべき皇軍勇士でもある。

國語の次に、否それと同時に來るものは、日本精神の學習だ。

日本人とは日本精神を所有し、且つこれを實踐するものを指す。わが帝國は、昔もさうであつたが、今後一層血統國家であつてはならない。たまたま內鮮は血統に於いても、少くとも、全人口の三分の一の混血率を持つてゐるさうで、一體となり一つの國民を形造るのにまことに好都合であることはいふまでもないが、大東亜共榮圈建設のためには、寧ろ血統が邪魔になる場合さへあり得る。況して八紘一宇の大理想を以つて、全人類を包容せんとするに於いてをやである。

しからば、如何なるものが、皇民であり、日本人であるか。それは、天皇を仰ぎ奉つて日本の肇國の理想たる八紘一宇を理想とする人民であるべきである。

であるから、朝鮮人が、皇民たるには、皇道を學ばねばならない。皇道を學ばずして皇民たることは出來ない。言換へれば、朝鮮人は、もともとから日本人であつた內地人と同じ氣持で、天皇を仰ぎまつり、同じ氣持で神社に參拜し、同じ氣持で、銃を取らねばならない。その間毫厘の隙があつても一體ではないからである。

朝鮮人が、この皇道精神、即ち日本精神を自分のものとするためには、國史も學ばねばならない。國文學も學ばねばならない。神道や武士道も學ばねばならない。禮儀作法も學ばねばならない。何よりも兵隊に行かねばならない。一生懸命にこれを學んだら、その個人も立派になり、朝鮮人全體が立派になり、而して日本が、今日の國民よりも、その三分の一だけ餘計に強くなるはずである。朝鮮の人口が二千三百萬あって、內地人の約三分の一あるから。

朝鮮では、皇道を學ぶために、皇道學會といふものが出來た。これは同志の者を集めて皇道の學習をしようといふのである。その第一囘の講習會が一月の十八日から二月の十五日まで、日曜と水曜とを除いて、每日開かれることになって居り、聴講の會員約六十名、城大の松本重彦敎授の國史（日本書記、古事記）、祝詞、同じく城大の尾高朝雄敎授の國家論（世界と日本）、朝鮮軍の河越參謀大佐の軍人勅諭、同じく朝鮮軍の山之內參謀中佐の、高度國防國家論、海軍の黑木參謀大佐の海軍の講義あり、その他萬葉、茶の湯、作法などの講義があるはずである。

この皇道學界の講習會は、連續的に、朝鮮各地に於いて開催されることになって居り、やっぱり十箇年五百萬人學習の目標で進まうといふのである。同會は京域大和塾に本部を置き會長[は]辛島純といふ朝鮮人である。

かゝる國語並びに、皇道學習運動は、朝鮮內に於いてのみ行はれていゝといふことはない。內地であれ、滿洲國であれ、北支、中支であれ、おほよそ朝鮮人の住んでゐるところなら、どこでも行はるべきであり、しかも早急に行はるべきである。これは非常時日本の力を增す運動であるから。

殊に內地に住んでゐる朝鮮人は、國語と皇道を學ぶために絶好の地位にある。現に內地在住朝鮮人は百萬を超えて居り、東京に遊學してゐる學生だけでも二萬を數へるさうであるが、これだけのものを全部、皇民化することは甚だ重要なことであるといはねばならぬ。その中では朝鮮の學生にみつちり日本精神を學習させることは急中の急といへよう。

中央協和會でこのために盡力されることは心強いことである。また野口遵氏が東京遊學生のために、朝鮮總督府に五百萬圓を寄附したので、學務局では、それを基本金として年二十五萬圓の收人を以つて、東京朝鮮學生を輔導するさうである。大いに期待すべきであらう。

內地に在住する朝鮮同胞の皇民化については、內地人が大いに責任を負ふベきであると思ふ。

百萬人の內地の方々が義勇兵になつてくれないか。一人の內地人が一人の朝鮮人に國語と日本精神とを敎へ込んでくれないか。私がお願ひするのは、敎へることよりも、一人の內地人が一人の朝鮮人を兄弟の如く姉妹の如く愛して貰ひたいといふことだ。これだけで澤山である。

あなたが一人の朝鮮人を――學生でも好い、勞働者でもいゝ、または旅行者でもいゝ――兄弟の如く姉妹の如く、愛してくれたら、愛される彼は、あなたを通して、國語と日本精神を學び、あなたを通して、日本を愛し、すべて日本的なものを愛して、漸次自分のものとすることであらう。そして彼をして、お國のために生命を捧げしめるのであらう。あなたは、陛下のために一人の戰士を得たことゝなる。否一人の戰士ではない、彼の家族や、兄弟や子孫までも獲得したことゝなる。同時に彼に最上の幸福を與へたことゝなる。なんと働き甲斐ある仕事ではないだらうか。

あなたがもし、一人の優秀な學生をば、愛によつて獲得したとすれば、それは單に一戰士だけではない。陛下のため一將軍を、求めたことゝなる。

心を和げるものは人情だ。百の法令や説法よりも一滴の淚だ。淚はよく凶惡な人の心をさへも和げる力を持つ。朝鮮の民心は、もう威を以って壓へる時期は、とうに過ぎてゐる。今では、祖國日本より離れようなんて夢想してゐるものは一人もないだらう。たゞ、われわれは本當に日本人になれるのかな、本當にわれわれを尋常一様の日本人にしてくれる氣かな、と不安がってゐるだけである。

かゝる不安を一掃するには、或は政治的、立法的手段も必要であるかも知れぬ。しかし要は、「あなたとわたくし」とが淚で抱き合ふか否かにかゝつてゐると思ふ。淚なるかな、淚なるかなである。

筆者は、前後[十]一年間東京生活をした。最も大部分は學生々活であったが、その時のことを囘想して、私は二つの遺憾を感じる。一つは私自身、日本を學ばうと努力しなかつたことで、これは誠に愚かしき極みであつたと後悔してゐる。これは何も私一人に限つたことではない、當時の遊學生の殆んど全部が、私同様の愚かものであつた。今日の遊學生たちも、まだ、あまり日本を學ぶことに熱心でないと聞いてゐる。もしこれが眞ならば彼等は、私及び私と同時代のものよりも、もつともつと愚かな者といはざるを得ない。

東京にゐる朝鮮の學生諸君！諸君は何を學びに東京に行ってゐるのだ。各種の科學や技術をか。それは誠に結構なことだ。しかし、諸君は深く反省しなければならない。諸君は學者になる前に、技術家になる前に、詩人や藝術家や敎育家になる前に、先づならなければならぬものがある。それは　天皇陛下の臣民になることだ。皇道を學ぶことだ。日本を知り日本精神を諸君の精神にすることだ。これなくしては、諸君の優れたる頭腦も學問も、技術もあたら無用なものになつてしまふ。

諸君は、口癖のやうに、諸君の前途の希望の低きを嘆ずる。諸君は諸君の先輩が、立派に學問をして居りながら、職業なくして[燻]るか官その他の職に就いても萬年下積みで終ることを、諸君の陰鬱な前途の事實的表示なるが如くに思つてゐる。「朝鮮人は使つてくれやしない」、と不平を言つてゐる。

ところが諸君よ。諸君が眼を拭いて明かに認識しなければならぬところが、實にこの點だ。且らく私の言に耳を傾けて頂きたい。

なるほど、非常時日本は多くの人材を要望してゐる。實は現に人的資源が足らないんだ。しかし、日本が如何に人材を要望せばとて、日本人ならざるものは使用出來ない。如何に人材が足りなくても、英國人を官吏として迎へ、米國人を技術者として工場に雇ひ入れるやうなことは出來ない。況して、ドィツ人やイタリア人なればとて、日本の軍隊にこれを採用するわけには行かぬではないか。日本が要望するのは日本精神を持つた日本人だ。

東京に學んでゐる朝鮮の學生よ。君に訊く。率直に返事してくれ。君の學校の內地人學生が、しかあるが如く、君は陛下の御ために生命を捧げる忠誠を持つてゐるか。君はすべての日本的のものを、君の寶として、君の血を以ってそれを護るだけの、愛國心を持つてゐるか。それにも拘はらず、君がもし國家から除物扱ひされるなら、君の文句には理由が立つ。もし在京二萬の朝鮮人學生が、全部君のやうな、大君への忠誠と、日本の國土や文化や國家理想への愛國心を抱くやうになったら、決して決して諸君は職業が得られぬとか、差別されるとか、そんな心配はしなくていゝのだ。諸君の先輩は、まだ日本人になり切つてゐないから、國家の諸機關から信賴されてゐないのだ。信賴されぬから使用されぬのだ。それを差別のためだと思ふのは、われわれの邪推以外のなにものでもないのだ。

だから遊學生諸君！愚かしき先輩の覆轍を踏みたまふな。諸君が或は四五年、或はもつと永く、或はそれより短かく、東京にあって學業を終へる間に、一生懸命に日本を勉強したまへ。國史や國文學も學び、國語に精通し、日本の風俗習慣、禮儀作法に自由自在となり、日本の家庭や、村や、一般社會をよく見て、專門家とならぬまでも、尋常一様の一日本人として、精神に於いて、實踐に於いても、退けを取らぬだけの修行をしたまへ。そうしたら、諸君の前途には光明があり、引いて朝鲜人全體の國民的地位が、內鮮一體の水準の上に引上げらるに決まつてゐる。

唯この道あるのみで、これを他にしては道はないのだ。

次に筆者が十一年の東京生活で、遺憾に思ふのは、內地人との交はりが少なかつたことだ。その責任は私にある。私は生來非社交的であったことや、偏狭な民族感情を抱いたためであつたと思ふ。それでも数人の親友はあつた。いろいろとお世話にもなつた。

しかし、こゝで少し邪推さして頂きたい。內地の同窓たちも、私をさして大事にしてくれたとはいへない。彼等がもつと私を大事にしてくれたら、もつと家庭にも呼んでくれ、私の下宿にも尋ねて來てくれたら、私はもつと早く日本精神を體得し、內鮮一體に眼醒めたかも知れぬ。あの僅か數人の內地人の友人の溫情でさへ、私をして、日本を懷かしく思はせる強い動機となつたことを思へば、もつと澤山親友があつたならと思はざるを得ない。

私はたゝ一囘內地の友人の家庭に泊めて貰つたことがあるが、その暖かい、美しい日本家庭の印象は、私の魂に深く深く刻み込まれて今だに忘れられない。今日在京二萬の學生にこの體驗を持たせたいと思ふ。

一般朝鮮人が內地人と接觸するといへば、學生として先生に、人民として警察官やその他の官吏に、そうして商人に限られてゐるが、それはいづれにして、なつかしい印象を殘すやうなものではない。むしろその逆の場合が多い。[[2]](#footnote-2)

家庭の床の間の前でこそ、日本人は、その本然の親切や美しい情味を見はすのである。[[3]](#footnote-3)

取止めもない隨想に結論など附けるにも及ぶまい。要求されたスペースも盡きたから筆を擱かう。唯一言。朝鮮人は國語を日本精神を學ばう。そして內地人は、朝鮮人の某縣人と同様の日本同胞であると見、感じ、而して愛することを學ぼう。それさへ實踐したら、日本は必らず強く大きくなる。われわれの子孫は、無限の光榮を一體に享受する。

―（昭和十六年一月十六日京城にて)―

1. 1941年2月に中央協和会の機関紙『協和事業』（3-2）に掲載され、同年5月小冊子として発行された。本文は初出を底本としている。小冊子ではすべての漢字にルビがふられている。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 小冊子ではここに「少なくとも過去に於いてはさうであつた」という文が挿入されている。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 小冊子ではここに「協和事業は先生や、警察官や官吏やその他の人々が片苦しい上下を脱いで床の間の情味によつて事に當らんとするものであらう。私は切にさうあつて欲しいと希望せざるを得ない」という文が挿入されている。 [↑](#footnote-ref-3)